

そして彼が死んだ

Kenzo Kitakata

錆びた日々の亀裂。平凡に生きようとした男の胸になにか去来したのか。新しい女、新しい闘い——。内側から崩れゆく男の人生の夜。

北方謙三



そして彼が死んだ



Kenzo Kitakata

北方謙三

錆びた日々、亀裂。平凡に生きようとした男の胸になにが去来したのか。
新しい女、新しい湯、……。内側から崩れゆく男の人生の夜。

集英社

そして彼が死んだ

一九九四年一〇月三〇日 第一刷発行

著者 北方謙三

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

〒一〇丁番 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇〇

電話 編集部 (〇三三) 三二三〇—六一〇〇

販売部 (〇三三) 三二三〇—六三九三

制作部 (〇三三) 三二三〇—六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 ナショナル製本協同組合

検印廃止

乱丁・落丁本が方一ございましたら、本社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

そして彼が死んだ

第一章

1

笑っていた。

八年前の面影。はつきり残っている。

むこうから来る人間を押し返すように、小川正二は肩を張った。擦れ違える余裕は、充分にある。肩を張ることに意味はなく、見えないなにかに抗おうとしてみただけだった。

前の人間の背中が動いた。小川は、ポケットに突っこんでいた左手を出した。笑っている。

十八年前の面影。それも残っているのか。

流れてきた煙を、小川は掌でちよつと払った。自分の前に漂いはじめたなにかもそれで払い、前にある背中だけに眼をやった。

小川の番が来た。

どうでもいいような気分が、小川を包みこんだ。躰は、動いていた。世間でこうやる、と決められた通りの動きを、ほとんど意識もせずになぞっていた。

それでも、写真に背をむけた時、額はかすかに汗ばんでいた。

焼香の列は、もう途切れそうになっている。

出棺は待たず、小川はそのまま駅にむかって歩きはじめた。ネクタイを引き抜き、ポケットに突っこむ。ネクタイを締めたのが、何カ月ぶりなのか考えてみたが、はつきり思い出せなかった。

晴れている。秋の終りの風は、それでもどこか肌に冷たかった。街路樹の色づいた葉も、舗道に落ちはじめている。

声をかけられた。

「やあ」

ふり返った小川に、佐々木はまた挨拶の声をかけてきた。

「知らせた方がいいのかどうか、迷ったんですがね」

佐々木は、まだ黒いネクタイをぶらさげたままだった。

この男が、なにか知っているはずもない、と小川は思った。この男にかぎらず、誰も知りもしない。小川は、歩きながら煙草に火をつけた。佐々木が肩を並べてくる。

「まだ若くて、きれいですよね。もつとも、写真を見たかぎりの話だけ」

煙を吐いた。秋の風が、すぐに吹き飛ばしていった。

「小川さん、会ったことありましたか？」

「いや」

「坂田さんって、再婚だったんですね。よくよく、女房運のない人だな」

坂田真治は、四十五、六にはなっているはずだ。そばに座って参列者に頭を下げていたのが、多分息子だろう。高校の制服を着ていた。

「まあ、元氣を出して仕事を続けてくれると、俺たちも助かるんですがね」

坂田の仕事は、中古車の輸出だった。輸出前の点検で、小川や佐々木の工場が使われる。大した点検をするわけではなかった。外装の傷を直すことが一番多い。次にサスペンションだ。エンジンなどをいじりはじめると、きりがなくなる。註文に応じた仕事を、小川はやるだけだった。小川の工場で扱っている仕事の、十分の一度だ。

駅が見えてきた。その手前はありふれた駅前商店街で、それほど人は多くなかった。

「いくらですか、小川さん？」

佐々木が気になっているのは、香典をいくら包んだかということらしい。小川が二本指を出すと、ちよっとほっとした表情を見せた。

小川より五歳近く若く、四十になったばかりといったところだろう。白髪は小川より多い。

小川はポケットを探って小銭を出し、自動券売機で切符を買った。佐々木は、来た時に帰りの切符を買っていたらしい。

同じ方向で、電車の中でも佐々木の無駄話に付き合った。時々、無駄ではないことも言う。佐々木に知らされなければ、順子が死んだのを知るのは、ずっとあとになったはずだ。

「このところ、坂田さんとの仕事が減ったと思ってたら、奥さんが病気だったんですね。誰も、知りませんでしたよ」

「あまり、知られたくはなかったんだろう。俺でも、多分そうだな」

「ですよ。さすがに、坂田さんも落ちこんでたようだし」

駅をいくつか過ぎる間、小川は吊革につかまって立っていた。

小川が、先に降りた。

駅から歩いて五、六分のところに、小川の工場はある。知っている人間に何人か会い、そのたびに小川は頭を下げた。

「お帰りなさい」

哲夫が声をかけてくる。油の匂いが、小川を包みこんできた。奥のドアを開け、事務所に入った。デスクがひとつと、書類棚とロッカーがあるだけの事務所である。事務所に並んで、部品の倉庫がある。

小川はロッカーを開けて、繋ぎ^{つな}を出した。

上着を脱ぎとして、焼香の帰りに手渡された挨拶状と、一緒に添えられた塩に気づいた。「なにを清めろってんだい」

声を出して呟き、小川は塩の袋を破った。塩は、足もとにこぼれ、薄く積もった。それを、靴で二、三度払う。

繋ぎに着替えて、工場に出た。

リフトが三つあり、車は三台入れられる。いまは、二台がリフトであげられているだけだ。古いBMWの方に、小川はとりかかった。八万キロ走っていて、あと四万キロは走りたい、とオーナーは言っていた。そういう車は、小川が自分でいじる。

エンジン音がし、旧型のコルベットが工場に入ってきた。

「パワステのオイルに、エアが噛んでるだけですよ、こいつ」

安広が、降りてきて言った。

「ハンドル切るたびに、ガリガリ音をたてやがんです。どこか毀れてると思いますよね。普通だったら、思うな」

「操舵系統を全部分解しろ。 그리스も足しておけ」

つまり、整備をする。それで、請求書の金額には、丸がひとつ増やせる。

工員は、哲夫と安広の二人で、哲と安と呼んでいる。小川は、親父さんと呼ばれていた。三人では捌ききれないほどの仕事で、いまのところある。

修理を頼まれた車は、近所の有料駐車場に入れている。五台分契約しているが、そこで修理待ちをする車は、いつも五台とはかぎらず、四台になったり、三台になったりすることもあった。

BMWは、サスペンションがへたっていることを除けば、深刻な問題はなにも抱えていなかった。増締めだけで、かなり乗心地がよくなるはずだ。ついでに、排気系を少しいじるつもりだった。排気音がよくなるだけだが、車好きにかぎって音を気にしたりする。

借りてある駐車場で修理待ちをしているのは、いま三台だった。五台いると、安心できる。だから

ら三台の時は、修理に手間をかけて時間を稼ぎ、二台増えるのを待つ。

レンチを動かしながら、小川は順子のことをぼんやりと考えていた。

八年前、順子はこのシトロエンCXを持ってきた。坂田の妻だっただけ電話で聞いていたので、不意を衝かれて小川はなにも喋らなかった。順子は、工場の名前で、小川のことを連想していた気配だった。十年の間に、順子は確かに大人になっていた。小川の頭の中では、二十歳だったころの順子の表情や仕草が、くり返し浮かんでは消えた。

頭で別なことを考えていても、手は自然に動き、工具を選択している。

哲と安が、古タイヤに腰を降ろして煙草を喫っていた。片手には清涼飲料の缶を持っている。午前十と午後三十分ずつの休憩は認めていて、二人とも勝手にそれを取るのだ。

小川は、BMWをいじり続けていた。車の腹の下を見ていると、いろいろとわかることがある。ぶつかった傷など、外装はきちんと直しても、腹の下には隠しようもなく残っていることが多い。車の腹の下は大抵頑丈にできているが、人間の躰で言うところの急所のようなところもあって、それがまた車ごとに違っていたりもする。

四カ所締めあげると、小川もレンチを置いた。しばらく、車の腹を見あげる。どこか悪いところがあれば、締めあげた時に見えてきたりするのだ。

BMWは、老いぼれてはいるが、ほぼ健康だった。

小川は工場を出て煙草をくわえた。工場内が禁煙であることは、小川が決めていた。

工場の前には、いくらか余地があり、古いタイヤなどが積んである。小川は、五つばかりまとめ

て置いてある、死んだバッテリーを覗きこんだ。どこかに捨てればいいというわけにはいかないものが、修理工場からはいくらでも出る。三カ月に一度ほど、そういうものは業者が引き取りに来る。

「親父さん、コルベットは触媒をはずしてくれとも言ってきたんですが、どうでしょうか？」

触媒をはずすと、いくらか馬力があがる。車好きの人間は、そうしたことが多かった。ただ、排ガスはひどくなり、規制値をずっと超えてしまうのだ。車検の時だけ触媒を付けるということは、しばしばやっていた。

「はずしてやろうと、おまえが言ったんだろう、安？」

「別に、勧めはしませんでした。が、触媒がどれぐらい馬力を殺しているかは、教えてやりましたよ」

「そういうのを、勧めたと言うんだ」

安広も哲夫も、そういう作業は一応小川の許可を取る。法に触れることだからだ。いざとなれば、すべての責任は、小川自動車工業ということになる。

「取ってやれ」

「そうですよね。コルベットだもんね」

工場に出して、いくらか馬力があがっていることをオーナーが実感すれば、次にはチューン・アップを頼んでくることもある。そういう特別な仕事の方が、ずっと金にはなるのだった。

小川は、捨てる部品が積みあげられているところへ行った。工場と塀の間。そこに積みあげられている部品が、時々役に立つ。古い部品を使っても、新しい部品を使ったことにして請求書が書け

る。

なにがなんでも、金を儲けたいわけではなかった。ただ、効率よくやりたい。部品にもよるが、新品より具合がいいことも多いのだ。新品を使って、文句を言われることもなかった。

坂田のところから来る中古車の整備は、ひと月に十台足らずというところだった。大抵、五台積みのキャリアカーで運ばれてきて、翌日には返す。大して手間のかからない仕事だが、あまり増やそうという気もなかった。佐々木の工場などが満杯になった時、仕方なく増やしてやる程度だ。

順子は、坂田に勧められて、小川の工場を訪れたのだった。坂田は、小川の技術を昔から買っていた。シトロエンCXは、六本のシリンダーのうち二本が、リングの磨耗などでもととの力を出さなくなっていた。つまりシリンダー内の燃焼がうまくいっていなかったのだ。修理に、三日かかった。三日とも順子は顔を出し、エンジンを覗きこんでいた。

試運転を、一緒にやった。

「親父さん、ベンチシートのアメ車って、扱ったことがありますか？」

「あるよ」

「俺の友だちで、ベンチシートにアイアンバンパーのアメ車を捜してんのがいるんです。当然、コラムシフトでね。そいつが手に入れたら、一度見てやってくださいませんか？」

「おまえがいじってやれ、哲。俺は脇から覗いていよう」

「そうですか。親父さんがそばにいてくれるんだったら、友だちも納得します」

「昔のアメリカンV8ってのは、タフでなかなかいいもんだぞ」

哲夫が、嬉しそうに笑った。部屋代を安くあげるために、工場の二階に住んでいる。そうやって金を溜め、なにを買いたいのかは訊いても言わなかった。

小川は、BMWの下に戻った。哲夫と安広も、それぞれの持場に就いている。サスペンションに、オイルぐらい注入しておいた方がよさそうだと小川は思った。それで、多少乗心地は違ってくる。哲夫が電動ドリルを使いはじめ、その音が工場の中に満ちた。

2

水割りを、シングルで頼んだ。

酒を飲んで運転することを、当然ながら陽子は嫌った。二、三杯だと、ほとんど気づかれることはない。

夫婦者がやっている、小さな店だ。若い連中が喜ぶ洒落た店では気が重いという男たちで、そこに繁盛している。開店したのは三年前で、小川の家まで二キロちょっとの距離だった。

三年前は新しかった『トレロ』も、いくらか古びた感じになってきている。安普請だとこんなものだろう。小川が通っている酒場は、ここだけと言ってよかった。国産だが、悪くないウイスキーをキープしている。

一杯目の水割りを飲み干しグラスを鳴らすと、圭子が前へ来た。氷を足し、馴れた仕草で水割り

を作る。

「二人組、最近は連れてこないのね、小川さん」

「やつら、こんな店よりも、もっと派手なところへ行きたいのさ。もともと、酒がそんなに好きだというのは違うからな」

「そんなことないよ。三田くんなんか、こんな店の方が似合ってるな。住んでるところだって、小川さんの工場の二階じゃない」

「あいつは、欲しい車があつてそうしてるんだ」

「そう、それも知ってるけど」

哲夫は、安広と較べると女に好かれるタイプだろう。やさしさが、いつも表面に出ている。ただ、女の扱いは安広の方がうまそうだった。車のいじり方を見てみると、なんとなくそんなこともわかる。

「小川さん、今日はなんとなく感じが違うと思ったら、黒いスーツなんか着てるのね。それで黒いネクタイなんか締めると、まるでお葬式じゃない」

小川は、ただ笑い返した。ポケットの中のネクタイ。こんなところで見せようという気は、起きるはずもなかった。

「結構、スーツなんか似合うのよね。滅多に着てないけど」

いつもは、ジャンパーだった。ほんとうはブルゾンと呼ぶもので、センスがいいと言われることもあるが、選んで買ってくるのは陽子だった。服に、あまり気を使ったことはない。女の服は、も

つとわからなかった。

ただ、スーツだけは自分で選んだ。ネクタイも靴も、自分の趣味だ。もっとも、七、八着しか持っていない。着る機会などほとんどなくて、一年に一着も買いはしないのだった。

ネクタイを締め、スーツを着こむ。若いころから、嫌いではなかった。違う人間になったような気分。それが悪くなかった。スーツを着る職業に就いていたら、馴れてしまっただろうが、仕事着は繋ぎだった。スーツを着て違う人間という気分は、だからいまも続いている。

「ママは？」

「八時過ぎね、きつと。十一時半には帰っちゃうし」

下原と妻の良子、それに圭子を入れた三人が、この店の陣容だった。もっとも、良子は春ぐらいから店にいる時間が短かくなった。ひとり息子が、私立の中学を受験しようとしているのだ。

四人組の客が入ってきて、ひとつだけあるボックス席に座った。圭子が、愛想笑いを浮かべてそちらへ行く。カウンターの中は、下原だけになった。『トレロ』にも、そろそろ客が入りはじめる時間だ。

「息子に夕めし食わせて、なにを勉強するかってことをメモに書いて渡して、やっと店に出てくるんですよ。いない間、テレビでも見てるに違いない、と私は思ってたんですがね」

下原がそばに来て言った。カウンターは、小川と、最近時々見かける初老の男の二人だけだ。九時ごろから混みはじめるのは、繁華街にある店ではなく、住宅街の近くにある店だからだろう。駅から自宅まで歩いて帰る途中で、寄って飲んでいく勤め人が多いようだった。

「女親ってのは、息子がかわいくて仕方ないみたいですね。小川さんとも、息子さんひとりでしょう」

「もう高校生だ、うちは」

「大学の受験がありますね」

達也が大学へ行くつもりなのかどうか、小川は訊いたことがなかった。陽子は時々達也の進路についてなにか言うが、自分で決めさせろと小川は答えるだけだった。

達也が相談してくれば、小川もなにか言うかもしれない。

「大会社に勤めたりするのは、窮屈なもんだろうと、私なんか思うんですがね。これでも、カウンターの中から人生ってやつは見てきてるわけだし」

カウンターの中から、どんな人生が見えるのだ、と小川は思った。愚痴と失意と疲れ。見えるのも聞えるのも、その程度のものだろう。

「小川さんみたいに、自分で資格と腕を持って商売している人の方が、私なんかにはずっと安定して見えますけどね」

「毎日、油まみれだよ」

「いいんですよ、それで。私なんか、酒まみれです。それでも、きちんと生きてるつもりですから」

小川が笑うと、下原は三杯目の水割りを作りはじめた。ボックス席は賑やかで、BGMのジャズも消されがちだった。